

和紙

だより

■目次

越前和紙への提言 浜井弘治さん
 ショップレポート WACCA
 滝き場探訪 RYOZO 柳瀬良三製紙所
 和紙ミニコーナー
 情報欄

4 4 3 2 1 頁

越前和紙への提言

■浜井 弘治(はまい こうじ)

山口県下関市生まれ。文化服装学院アパレルデザイン科卒業。第61回装苑賞を始め、ファッション賞受賞多数。八王子の繊維メーカーを経て、(株)三宅デザイン事務所に入社。1991年、国際テキスタイルデザインコンテスト「ファッション振興財団賞」受賞を機に独立。アパレル製品の製造過程を示したインスタレーション「工場見学」展を発表。その後、残糸シャツ、町工場とのブランディング、和紙デニム、和紙ジャージー等、和紙系テキスタイル開発、衣料の最終地点/反毛MA-1、バクテリアシャツ、ガラ紡デニム等、ファッション業界の隙間を形にする「(株)うるとらはまいデザイン事務所」を設立。現在、山口県に拠点を移動し活動する。
<http://hamaikoji.jp/>



■浜井弘治さん(ファッションデザイナー)
 「和紙生地素材開発から、説得性ある日本のウェアを探求」

●繊維産地で育まれた知識

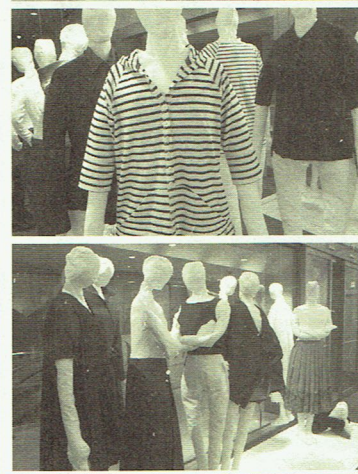
家は、下関でテーラーを営んでいましたが、両親から特に家業を継げということも言われませんでした。中学生の時の一九七六年、「ポパイ」という雑誌が創刊され、大いに影響を受けた記憶があります。

文化服装学院入学当時、折しも時代は素材にこだわる時代になっていて、三宅一生、山本耀司、川久保玲さんなども素材から開発するデザイナーでしたし、彼らとコラボしていた新井純一や宮本英治などのテキスタイルデザイナーは繊維産地の工場から出てきた人達で、創造的な布作りをしていました。ある時、ビジネス部門の先生が「これからのデザイナーは、ただデザインするだけではなくて、三年間川上(原材料メーカー)において、三年間川中(アパレルメーカー)、三年間川下(流通)にいるような人が出てきたら面白いね」という話を聞いて、生涯ファッションの道を目指していくのだったら、人がやったことのない技術的な側面を見つづけるべきだと思つたのです。卒業して就職したのが、八王子の「みやしん」という繊維メーカーでした。次第に布の触感から使われている糸の太さや原材料が分かるようになっていきました。ニットや織物のことも勉強し、お陰で繊維の生産知識は私のデザインをする時の強みとなりました。

●日本人のものづくりの知恵

装苑賞受賞作品は、立体的な水玉模様のある

「生活工房ギャラリー」(東京世田谷区)で展示された「未来を着る、浜井弘治の和紙のプロダクト展」(2015年12月26日～2016年1月24日)の模様



布で、素材から自分で作り直しました。それを三宅一生さんが評価して下さい、それを機に、三宅さんのパリのチームに入った。仕事を教えてくれない代わりに、服を作る時に従来の服作りとは全く違った発想が求められ、素材開発も自由にできる社風でした。五年いて東京で独立しましたが、今度は少し先鋭的なモードから離れ、生活の道具としての服に興味があり、他の道を模索し始めました。

身近なTシャツやカジュアル服を繊維産地と組んで素材から開発したいという思いは持ち続けていたので、もう一度古巣の八王子に戻って、見つけたのが軍手屋さんの工場の隅に山積みになっている「残糸」でした。軍手の糸は白だけでなく、工業用軍手には「落ち綿」を利用した糸や、カラフルな残糸等が使われます。残糸は先染め糸で布地を生産している工場などによく出るもので、もったいないので普通一年くらいはとっておきますが、在庫で税金がかかるため、結局お金を払って廃棄するのです。この処理に困っているという残糸でオリジナルの生地を作りました。カラフルなミックス調の霜降り生地でTシャツやパーカー、編み地を変えてポロシャツに展開し、見事にヒットしまし

た。

まだ、エコや再利用という意識は全くない時代でしたが、当時既に日本には、布地を作り、服になり、繊維の最後を有効利用する「ガラ紡」や「反毛」の産地の流れがシステムとして出来上がっていた。もったいないとか、大切にしたいという思いで、安い素材やシステムを探してきて、手に入れて、工夫して、販売まで考える日本人の知恵が昔からあったことに感心しました。

●和紙デニム、和紙ジャージー、和紙生地の可能性

オリジナルのジーンズを作りたいと考えていた時に、和紙に出会いました。高知や島根の博物館で、日本人がいかに生活道具の中に和紙を使ってきたか、また電解コンデンサーペーパーなどのハイテク技術にも使えることも知り、和紙の糸はひよつとしたら、ポリエステルのように使うことができるのではないかと閃きました。ポリエステルは石油精製品ですが、大変汎用性のある素材で、天然素材と燃焼することによって多様な素材に変化させることができます。伸縮性を持たせることもでき、軽くて



和紙デニム、和紙ジャージーのウェア



洗濯性にも優れ、しかも安い。ただ作るのには大きなロットが必要なのです。小ロットで、ポリエステルと同じことができたらと考え、タテ糸にデニムの糸、横糸を和紙にして「和紙デニム」と名付けました。作ってみると、軽いのは勿論、どの糸を織り込んだものより高級感が出たのです。今ではこの会社も和紙デニムを出していますが、間違いなく最初にやったのは私だと自負しています。その後、広島県福山市の擦糸さんと出会い、綿糸の周りに和紙糸を巻いて作る伸縮性のある糸を見つけましたが、服にするには余りにラフだったので、一緒に改良を加え、この「和紙ジャージー」で、軽くて速乾性のTシャツをデザインしました。この和紙糸の原材料はマニラ麻で、木綿の十倍の吸水性で軽さは三分の一です。最近では冬場、重いコートは敬遠されるので、ウールに和紙を混ぜるのもいい。夏のクーラー時期の冷え過ぎを防ぎ、乾燥を防ぐ調湿機能のある素材も期待できます。現在、春夏秋冬の和紙素材を模索中で、和紙糸に何を組み合わせるかで、新たな機能や風合いが生まれ、安定供給もできれば、強力なアパレル素材としての可能性は広がります。しかも豊かな歴史と文化が背後にあるので、世界に発信できる説得力のあるものづくりができると思うのです。

■(株)WACCA JAPAN(わかじやばん)セレクトショップ感覚で和紙消費の機会を増やす

(株)WACCA JAPANは、デザイナーの感性で和紙を作る人・使う人を橋渡ししながら和紙の消費を喚起したいと、森崎真弓さん(代表取締役)と富井千春さん(取締役)によって、二〇一四年設立された。WACCAとは、「和」の文化、和紙に欠かせないアイヌ語の「水=わか」の様なものを繋いで「輪=わか」にしたいという思いが込められ、一般印刷物の和紙使用相談、和紙製品の企画・デザイン、販売、和紙素材の開発を行う。東京都品川区の事務所兼ショールームに伺う。



楮の葉(中央)と黒楮の葉をモチーフにしたロゴマーク
wacca URL:
<http://www.wacca-paper.jp/>

●まず印刷物に和紙を使う機会を増やす
森崎さんも富井さんも各々グラフィックデザイナーとして働いてきた。山根折型礼法教室に通っていた縁で知り合い、和紙への思いとやりたい事が一致したという。「全国四十社ほどの和紙の製紙会社(工房)を回りましたが、産地と消費者を戦略的に橋渡しする人がいないと感じています。デザイナーが入っているプロダクトもありますが、どうしてもそれが一個ずつのプロダクトになってしまい、広がり発展しない。又予算その他の都合で、産地全体が盛り上がる仕組みにはなっていない」と森崎さんは現状を分析する。

森崎真弓さん代表取締役と富井千春さん(取締役)

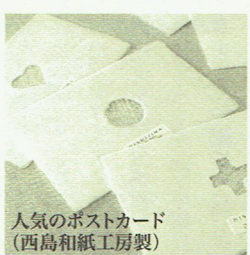


ショールーム内部

WACCAは和紙製品を開発するというより、まず和紙を使いたいと思ってる制作会社や代理店に照準を合わせ、名刺やパンフレット、パッケージなどの印刷物に和紙を使う機会を増やすことを目指した。デザイナーとして培った豊富な印刷知識とセンスで、制作側と産地双方の都合を聞き、相談に乗る事が

できれば和紙消費の分母が大きくなる。都市部の印刷業界も、小ロット、多品種印刷、短期間納品の競争が激化しており、他社との差別化が課題となっている。特殊印刷や活版印刷が得意な会社に、機を見て和紙の使用を持ちかけ、一緒に和紙を盛り上げようという話を。時には印刷屋泣かせの技術的な無理難題をお願いすることもある。「予算で話が立ち消えになることもありませんが、私たちが話したことを温めておいて下されば、予算が取れた時に戻ってきてもらえたら嬉しいです」と富井さん。

●刺激剤としてのプロダクト
販売している和紙製品の中には仕入れ商品も含まれており、紙の選択やパッケージングもハイセンスで値ごろ感もいい。しかし、これらの商品は「和紙でこんなこともできる、見たこともない素敵な紙がある」という和紙の魅力と可能性を伝える刺激剤として提えている。



人気のポストカード(西島和紙工房製)



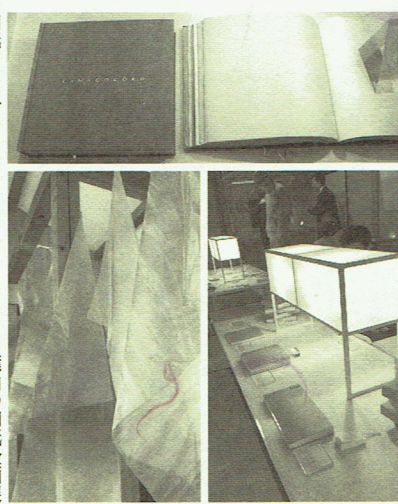
ボタン入りオリジナル和紙

商品アイテムは、封筒&カード、ハガキ、便箋、名刺、懐紙、和紙雑貨、それに紙そのもののセットなど。一番人気の真真中に富士山やハートの穴を開けたハガキや溜め漉き水彩画紙で作られた名刺は、和紙の「耳」の魅力を存分に伝えている商品。手染め柳しぼり染め紙と刷毛目と紙をセットにした便箋は、薄様和紙の透け感の美しさを伝えている。落水、引つけ、友禅、変わった所ではバナナ、新茶入り、稲藁入りなどの生紙も色・柄・材質が厳選してあり、この紙で何を作ろうかと楽しい気分させてくれる。お試しで使ってみたい人のために、選びやすい小サイズの紙セットもあり、透明のパッケージに入れてある。買った紙を長いまま巻いて持つて帰ると、扱いにくいという経験から、こういう包装にしたという。都会+消費の達人+女性+デザイナーのセンスが随所に光る。

●葉山での和紙企画展

昨年十一月、神奈川県葉山町の海際に建つ築九十年の日本家屋をリノベーションした貸別荘を五日間借り、和紙の可能性を紹介する企画展を開催。会場には、全国の和紙産地からこの企画に賛同・協力してくれた職人やアーティストの作品(タペストリー、照明、パネルアート、書、掛軸、クラッチケース、二曲屏風、窓装飾、障子など)、及びWACCA販売品に加え、実験的な空間インテリア演出例なども展

示され、延べ三〇〇人の人が訪れた。中でも耳目を集めたのが、WACCAがアイデアを暖めていた和紙アートブック「TANAGOCORO」だ。厳選した五十六種の和紙が綴じられた見本



和紙アートブック「TANAGOCORO」

葉山の和紙企画展

帳のような本で、一枚ずつの和紙には解説書も、説明も一切ない。産地やブランド、原料、価格、手漉き・機械漉きといった製造方法に捉われることなく、「和紙」という素材にダイレクトに触れ、インスピレーションの元として、あるいは心休まる聖書のように、手元に置いて五感で楽しんで欲しいという。百冊限定制作で、十年くらいかけて売れば良いと考えていたが、一冊八五〇〇円と高額にもかかわらず、既に半分以上は売れてしまった。

「単純にこういう本が欲しかった。こんなに綺麗な和紙が沢山あるから、束になったらもつと綺麗に違いないって。この紙も入りたい、あの紙も入りたいと出していったら、最初は原価だけで非現実的な値段になってしまった。」

(笑)「
今後はワークショップなども開催予定。普通のお教室ではつまらないから、「食と和紙」なんてテーマはどうかしら?とお二人は思案中だった。

漉き場探訪

RYOZO 柳瀬良三製紙所
「二代三様で受け継ぐ紙漉き」

柳瀬良三製紙所は越前の歴史の中で暖簾分けを経て、現在創業六十年となる。元々美術小間紙から始め、生産の九十%以上は和菓子包装紙、しおり、お菓子の包み紙等。薄紙楮紙、技法は引掛掛け、落水の和紙を得意とする。現在、家族二代四人と従業員二人の六人で切り盛りしている。

●先代の良三さん

本年二月六日〜二月二九日、越前市「卯立の工芸館」では、当製紙所の先代、良三氏(平成二十三年没)の生誕百年記念「職人文人 柳瀬良三」展が開かれていた。良三さんは旧今立町に生まれ、書画を好み、戦争で中国へ行った時も、現地のお坊さんに書を習い、貯め書きした書をいただいたりしていたそう。戦後も和紙職人として働く傍ら、師について書を習い、又五十歳近くになって独学で絵筆を持つ様になり、俳画を中心に数多くの作品を残した。旧武生市の彫刻家・俳画家として活躍した池田片鍔氏(いけだへんてつ)とも親交があり、絵を習うのではないが、ちよくちよく家へ出かけて行つては話し込んでいたという。地元では「絵の好きなおじいちゃん」として親しまれ、誰彼となく作品をあげてしまう人であった。今回展示されたのは、そういう人達の家に残っている作品も集め、書、水墨画、俳句を添えた軽妙な俳画、「らくがき」と題された画帖や喜寿、米寿の句集なども並んだ。



「職人文人 柳瀬良三」展の様子



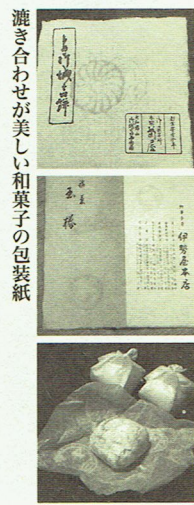
柳瀬徹三さん + ヒロ子さん

「義父は、好奇心旺盛で、色々なものを見るのが好きだった。骨董が好きで、年何回か京都や金沢の骨董市などに出かけて行つては、買ってきた品物がうちには多く残っています」と二代目夫人のヒロ子さんは、思い出を語る。

●和菓子の包装紙を開拓

先代良三さんの弟さんは、大阪市中央区で和紙の販売・営業を担当する「柳瀬商店」を立ち上げ、現在でも、古美術・骨董品、ギャラリ、お茶室などを併設した「和紙クラブ」という名で店は続いている。昔は親戚同士で、越前で紙を漉き、都会で紙を売り、営業するという形態が産地には結構あった。東京の商人の所に丁稚に入り、お客や商いのことを学ぶ風習もあった。力を合わせ、和菓子の包装紙需要を開拓し、老舗和菓子店を中心に注文を取り付け、今に至っている。もう五、六十年お付き合いの続いている和菓子店の中には、鹿児島のかん(明石屋)や姫路の「玉椿」(伊勢屋本店)など、その地を代表する有名店も多い。

「昔は一万円以上のお菓子を持つていくことも、ままありましたが、今は核家族で人数が少なくなり、お菓子のサイズも随分小さくなりました。冠婚葬祭需要も昔ほどではないので、持



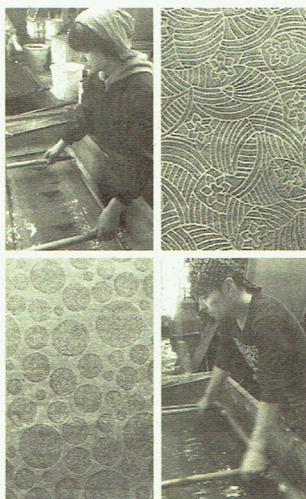
漉き合わせが美しい和菓子の包装紙

参するお菓子の一軒あたりの単価が安くなっています。私たちが漉くような高級和紙は二、三千円するものでないと割が合わないの、枚数は減ってきました。これも時代の流れでしょうか?と徹三さん。しかし、収める紙のロット数は、月三〇〇〇〜四五〇〇枚、年末近くには二万枚になることもあるというから、長年のお得意さんとは有難いものだ。繁忙期は、年末、盆、春の連休に合わせた納品時期だそうだ。

●若夫婦で新しい試み

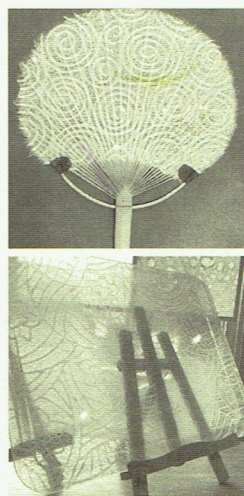
三代目を担うのは、婿の靖博・京子さん夫妻。近年、引掛掛け紙や楮100%の手漉き創作落水和紙を十二パターン開発し、好評だ。もともと製造していたレース状のお菓子の紙を応用し、モダンな感覚の水仙、渦巻き、水玉、葉っぱなどのパターンを薄様の紙に漉きこみ、透け感や透明感を活かした。図案はコンピュータを使わず手で描き、漉き型はオリジナル性を出すために、針金をハンダ付けするなどして、靖博さんが自分で作る。

柳瀬靖博さん+京子さん 水仙、水玉のパターン



「ただのグラフィック的なパターンではなく、実際の岸壁に咲く水仙、落ち葉の重なりに見える葉っぱなど、一味違ったストーリーを感じさせる柄にしたかった」と靖博さん。この紙は「落水団扇」やランチョンマットに展開した他に、東京の大手百貨店の目に留まり、福井市内のメーカーと組んで、透明プラスチックに紙を挟み込んだキッチントレイも開発した。照明器具作家や造形作家からこの紙を使いたいとの引き合いも多いという。

薄緑の紙に漉きこんだボタンが活きる、透け感が美しい
団扇とキッチントレイ



靖博さんによると、妻の京子さんの漉く紙はブレがないという。「紙漉きはその日の気持ちや体の調子が必要出てくるものですが、うちの奥さんの紙はブレがなく、紙の質が平均している。することも、言っていることもブレがない。だから僕は彼女がうまく紙漉きを継承できる様に黒子としてプロデュースしていきたい。残してくれたものを次の代に渡すために、一代一代違うことに挑戦していかないとけない。一代目が紙を漉いたら、二代目はデザインして、三代目はそれを売っていくというような繋がりを考えたい。今は儲けはないけれど、多分儲かるのは次の代だと思ってるから。」
靖博さんは、他にも国指定伝統的工芸品の異業種の若手職人グループ「福井七人の工芸サムライ」でも活動中である。

■和紙文化研究会月例会

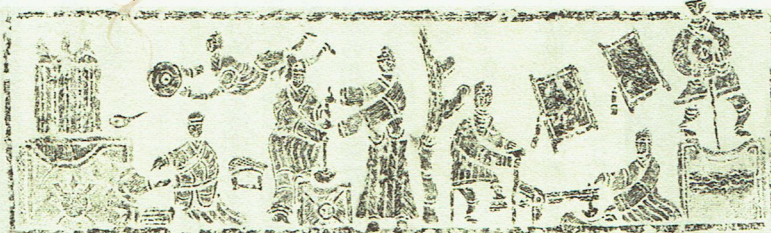
「漢画像石の造紙図と拓本」

和紙文化研究会二月例会(二月二十日開催)は、会員日野楠雄氏による中国の漢画像石の「造紙図」と拓本が紹介され、紙の歴史を辿る興味深い内容となった。

画像石とは、後漢時代中国の五地域に集中して残る王侯貴族や高級官僚などの墳墓における地下墓室壁面や棺などに彫り込まれた画像で、仏教が伝わる前の厚葬主義と経済性が生んだ画像文化である。その内容は生前の生活風景・故事・神仙世界など様々で、貴重な資料となっている。

日野氏は、一昨年末に画像石関連書籍『漢畫解讀』の中の「造紙図」を知り、中国前漢時代の紙は出土しているものの、明時代以前は知られていない、原材料が乾燥までの紙製造の工程図があるのに驚いたという。この画像石に描かれた造紙の様は「本当に古代の紙の製造工程なのか」という疑問を画像石と拓本の現地調査も踏まえ、又

蔡倫や『説文解字』に収録されている「紙」という文字との関係なども再検証しながら、その歴史的意義、内容やデザイン性について考察した。



■『漢畫解讀』2006年3月 文化藝術出版社 題評 馮其庸 解讀 劉輝 より

情報欄

●イベント情報

■「越前生漉奉書・木版・美人画」展

人間国宝九代岩野市兵衛氏抄造の生漉奉書を使った美人画などを展示
時:2016年4月10日(日)~5月9日(月)
場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)
4月17日トークショーあり



■神と紙のまつり(大掘り出し市)

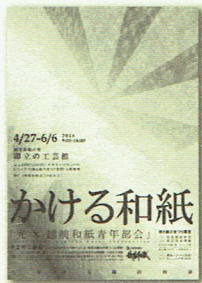
時:2016年5月3日(火)~5日(木)
場所:和紙の里通り(越前市新在家町)
特設テント和紙販売、バザー、クラフト教室など

■大瀧神社・紙祖神 岡太神社春季祭礼

時:2016年5月3日(火)~5日(木)
場所:大瀧神社・岡太神社(越前市大滝町)

■和紙青年部企画展「かける和紙」展

時:2016年4月27日(水)~6月6日(月)
場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)
今年は光がテーマです。
まつり期間中5月3日・4日はお茶会も開催。



■第36回越前陶芸まつり

時:2016年5月28日(土)~30日(月)
場所:越前陶芸村(越前町小曾原)
即売、イベント多数

■第45回金沢ペーパーショー2016

時:2016年6月17日(金)~19日(日)
場所:石川県産業展示館(金沢)
展示、即売、体験

■第8回越前和紙七夕吹き流しコンテスト(公募)のお知らせ

応募期間:2016年4月1日(金)~6月19日(日)
当日消印有効
展示期間:2016年7月7日(木)~7月24日(日)
いまだて芸術館
詳細:事務局(TEL 0778-42-0016)又は「越前和紙の里ホームページ」まで

■「持続発展する和紙産業を作るシンポジウム」開催

去る2月29日、ユネスコ無形文化遺産登録にもなった和紙を、産業として盛り上げようと、経済産業省主催のシンポジウムが東京で開催され、全国から手漉き和紙・機械漉きメーカー、和紙加工業者、紙卸商等の流通業者、和紙研究者など80名が参加した。超党派で作る「和紙の未来を作る議員連盟」事務局長の挨拶、産業の現状に関する調査報告の後、生活様式の変化による和紙の需要低迷と産業衰退の悪循環に陥っている和紙の国際競争力、ブランド強化を図る戦略「ブランディングの立場から和紙を考える」(物部信氏)の基調講演が行われた。

編集後記

巻頭の浜井さんのお話で、1970年代、バリコレに進出していった日本人デザイナーを支え、高付加価値のユニークな素材開発をした伝説的な生地メーカーやテキスタイルデザイナーが多くいることを知り、印象に残った。ユニークな素材の持つ力は大きい。和紙もしかり。(よ)